

建築科教室は美術学部本館の王朝風の玄関のあった建物の右脇の隅で正門から梅林がずっと続く奥にあり小人数にふさわしい煉瓦造のよい建物であったが今はない。

主任教授は岡田信一郎先生です、体も思うにまかせず講義中もせき込む事が多く痛々しい事であったが、すでに大正期において名作を幾多手がけられた巨匠の風ほうは衰えず、その生き生きした発言にはきびしさがあり、まれに行われた我々の学生の課題作の展示について批評を伺う折など短い言葉で、またシンラツな形容で急所をつかれた例は忘れる事が出来ない。関野貞先生の日本建築史、大沢三之助先生の西洋建築史は個人教育に近い五、六人で聴講したが、今から思うとゼイタクの限りだったと思う。それぞれ熱のこもった独壇場はきく人数など眼中にないお人柄の表れであった。美術部、工芸部を通じての合同講義も美校の特色の一つで大村西涯先生<sup>(歴)</sup>の東洋建築史<sup>(美術)</sup>、一年の時の板垣鷹穂先生の、そして二年三年の矢代幸雄先生の西洋美術史があり、それぞれ独自の境地に没入されている方々の力と美しさを感じとる事が出来た。構造の森井先生の講義はとうとう身につかなかったけれど、先生の人間性には思い出が多い。製図教室は今から思えばゼイタクな程のスペースがあり、学年の区別なく全学級三十名位の幾人かが自由に出入し仕事をし集っていた。初学年頃はよくコピーがあったがルネサンスの採色などは、その時はいやでも身についた作業だった。課題の一番最初は「上野公園に建つ交番」のデザインで私は早速粘土と取り組む事から始め、けずったり、足したりの格闘をした。以後噴水、門から小住宅、小駅舎と次第に建築ら

しい課題に移行していった。実技習得の側面として一年の間は石膏デッサン、二年からはずっと人体モデルによるデッサン（時に油彩）があり、午前中講義の合間に自由に建築科専用の絵画教室に行くようになっていた。モデルさんの約束は週末に自由に交渉した。絵の指導は長原孝太郎先生で、時折油絵科の友人も入って来て一緒に描く事もあった。また塑造の教室へ行って粘土をこね物の形をつくった。五年間の学生生活（と言っても私は途中で病気をし一年留年通算六年間）中私にとって特によかった事は三年と四年の二回の春休みを利用した京都を中心として近畿に実在する名茶室の実測（室内）とその内外写真撮影をやった事である。これは仲間四、五人と企画し学校からお願書を各方面に出し御承諾を得た上で実行した。これに関しては岡田先生に特に非常な御援助御配慮を煩わした上で可能な事であった。「中略」何も判らなかつた我々にもこの二年通算八十日間の作業は創り出された空間のみ力と近づく事の無限の深さみたいなものを教えられた。当時私の学生生活の後半は世相の激動に思想はゆれ動かされつつも、造型の美の追求にスケッチブックを一週間で描きつづし模型の切り屑でうずもれた日常であったが昭和五年春四月設計事務所の一隅へと出て行った。その時が実際に習う事へのスタートであり、それは現在もまだ続いているのである。

### ③ 職員一覧

職員

學校長

帝國美術院幹事從三位勳二等 正木 直彦 東京

教授

木彫、塑造 帝國美術院會員、帝室技藝員 正四位勳三等 高村 光雲 東京

解剖學、西洋畫 兼東京商科大學豫科教授 帝國美術院幹事從四位勳四等 久米桂一郎 佐賀

西洋畫 帝國美術院會員正五位勳四等 岡田三郎助 東京

西洋畫 帝國美術院會員正五位勳四等 和田 英作 東京

西洋畫 帝國美術院會員正五位勳四等 大村 西崖 靜岡

東京美術史 東洋繪畫史 正五位勳四等 白濱 徵 長崎

東洋彫刻史 考古學 正五位勳四等 島田 佳矣 東京

自在畫、教授練習、英語 正五位勳四等 古宇田 實 東京

圖案、繪畫、圖案法 正五位勳四等 沼田勇次郎 東京

建築學 (兼) 神戶高等工業學校教授 正五位勳四等 小堀 鞆音 東京

塑造 從五位勳五等 川合芳三郎 東京

日本畫 帝國美術院會員正五位 藤島 武二 東京

日本畫 帝國美術院會員正五位 岡田信一郎 東京

西洋畫 帝國美術院會員從五位勳五等 森井 健介 東京

建築學、西洋建築史、建築製圖 從五位 結城 貞松 東京

建築學、理學、建築製圖 從五位 長原孝太郎 東京

日本畫 帝國美術院會員正六位勳五等 六角注多良 東京

西洋畫 從六位勳五等 小林 萬吾 東京

蒔繪、漆工製作法 從六位 水谷 鉄也 東京

西洋畫 正七位勳六等 東 佳園 東京

塑造 正七位 東 京

日本畫

蠟型 正七位 松岡 輝夫 東京

鑄造(在外研究中) 正七位勳六等 大島勝次郎 東京

彫金、金工製作法 正七位 津田 信夫 東京

鑄造 正七位 清水 龜藏 廣島

塑造 正七位 建島彌一郎 和歌山

物理學、工藝化學、寫真術 正七位 森 芳太郎 大阪

繪畫及圖案 正七位 渡邊 啓三 東京

塑造 帝國美術院會員正七位 朝倉 文夫 大分

塑造 帝國美術院會員正七位 北村 西望 長崎

西洋美術史、西洋繪畫史、西洋彫刻史 正七位 矢代 幸雄 神奈川

鍛金 從七位勳六等 石田 英一 佐賀

日本畫 從四位伯爵 平田 榮二 東京

體操教官

陸軍步兵少佐 從六位勳六等 山口 一二 新潟

助教

圖案、繪畫、用器畫法 從七位勳六等 千頭 庸哉 東京

鑄造、鑄金製作法 勳八等 坂口 脛 東京

蒔繪、漆工製作法 堀井 政吉 東京

西洋繪畫史、英語(在外研究中) 森田龜之助 東京

彫金、金工製作法 海野 清 東京

體操、東洋彫刻史 陸軍步兵少尉正八位 田邊 孝次 東京

木彫 (在外研究中) 關野金太郎 神奈川

化學、化學實驗、工藝化學

蒔繪、調漆

體操、彫刻、  
教務掛兼務

日本畫

西洋畫

建築製圖、用器畫法

自在畫、手工、用器畫法

日本畫

自在畫、手工

鍛金

寫眞實習

講師(囑託順)

佛語

金工史

習字

體操、遠近法

教務掛主任兼庶務掛

蒔繪、漆工史

風俗史

工藝製作法

工藝製作法

寫眞實習

鑄造

建築製圖、建築裝飾法  
西洋建築史

從七位

陸軍歩兵中尉正八位勳六等

長口 宮吉 靜岡  
小岩 峻 岩手  
和田 季雄 東京  
小泉 勝爾 東京  
田邊 至 東京  
水谷 武彦 東京  
松田 義之 愛知  
篠田十一郎 岐阜  
中野繁次郎 長崎  
野口 六三 東京  
畑 保之 東京

陸軍歩兵少尉正八位勳六等

合田 清 東京  
香取秀治郎 東京  
岡田 起作 京都  
鈴川 信一 山口  
辻村延太郎 神奈川  
高橋 健自 號松華  
今 和次郎 宮城  
齋藤 佳藏 東京  
久米 福衛 秋田  
杉田 精二 德島  
大澤三之助 長野

帝室博物館鑑査官  
正六位勳六等文學博士

正八位

陸軍歩兵大尉  
從四位勳四等工學博士

東洋建築史

西洋美術史、西洋彫刻史(休講中)

英語、美學、色彩學

手工

教育學、修身

工藝製作法

圖案實習

寫眞術

考古學

寫眞實習

漆工實習

英語

寫眞製版術

柔道

弓術

劍術

教務掛並彫刻科兼勤

教務掛並西洋畫科兼勤

體操兼教務掛

學校醫(囑託)

東京帝國大學教授  
從四位勳三等工學博士

宮内技師正五位

東京博物館學藝官從六位

東京帝國大學文學部講師

東京高等工藝學校教授  
從五位勳六等

東京高等工藝學校教授  
正四位勳三等

東京工業試驗所技手

東京高等工藝學校教授  
從六位勳六等

東京高等工藝學校教授  
正四位勳三等

東京工業試驗所技手

東京高等工藝學校教授  
從六位勳六等

東京高等工藝學校教授  
正四位勳三等

東京高等工藝學校教授  
從六位勳六等

東京高等工藝學校教授  
正四位勳三等

東京高等工藝學校教授  
從六位勳六等

東京高等工藝學校教授  
正四位勳三等

東京高等工藝學校教授  
從六位勳六等

東京高等工藝學校教授  
正四位勳三等

東京高等工藝學校教授  
從六位勳六等

東京高等工藝學校教授  
正四位勳三等

東京高等工藝學校教授  
從六位勳六等

關野 貞 新潟

北村 耕造 京都

板垣 鷹穂 東京

村田 良策 栃木

中田 俊造 富山

上村 福幸 熊本

鈴木 清 東京

森田 武 京都

鎌田彌壽治 德島

今泉 雄作 東京

伊藤 龍吉 東京

澤口 悟一 宮城

藤井 昭 京都

伊東 亮次 東京

井上縫太郎 東京

本多 利時 東京

橋本 統陽 茨城

中川萬次郎 東京

岡 四郎 東京

岩崎 巖 山口

小幡 貞造 東京

濱野 大吉 千葉

助手

日本畫科勤務

山田 廉 號不鳴 玉

漆工科勤務

高野 重人 熊本

漆工科勤務

山崎覺太郎 富山

美術史研究室勤務

鎌倉芳太郎 香川

書記

會計主任

正七位勳七等 足立芳五郎 東京

會計掛

從七位勳八等 筒崎 謙齋 秋田

教務掛兼庶務掛

勳七等 增井 兼吉 東京

文庫掛主任

帝國美術院書記 北浦 大介 奈良

庶務掛主任

芹澤 閑 茨城

庶務掛

陸軍歩兵少尉正八位 宮本 純一 茨城

雇

會計掛

利部房太郎 静岡

文庫掛

青山 正治 東京

庶務掛兼教務掛

勳八等 木村 周吉 東京

會計掛

金田 春吉 東京

會計掛

佐藤 重吉 東京

金工科勤務

宮坂福太郎 東京

文庫掛

谷本千代雄 山形

教務掛

勳八等 富田簇治郎 奈良

會計掛

古宇田正雄 茨城

監視

渡部千次郎 東京

文庫掛

佐藤 ツル 新潟

〔東京美術学校一覽(從大正十二年)より転載)〕

④ 結城素明の在外研究

大正十二年四月十八日、日本画科教授・理事結城素明は文部省より「支那繪畫研究ノ為滿一年間英吉利國佛蘭西國及獨逸國へ在留」を命ぜられ、同年五月十日に出発した。日本画科教官の国費留学は下村觀山に次いで素明が二人目であった。

素明は一年間の滞在を予定していたが、私費延長して大正十四年三月四日に帰国する。留学の研究目標はロンドン、ベルリン、パリの博物館が收藏する敦煌および西域の壁画を模写することにあつた。その点については在外研究員派遣の「上申書」(大正十二年二月十二日発送)「從明治四十四年至大正十四年、留学生・練習生ニ関スル書類、庶務掛」に次のように記されている。

近年支那國ニ於ケル六朝盛唐ノ遺蹟ハ西人ニ發見セラレ獨逸國ノ「ルコック」氏「グルンウエーデル」氏ハ庫車ヨリ佛國ノ「ペリオ」氏「シヤパンヌ」氏及英國ノ「スタイン」氏ハ燉煌ヨリ發見シタル畫、壁畫、佛像其他ノ畫図ハ實ニ莫大ノ數ニ上リタルモ悉ク各自ノ本國ニ齎歸シ現ニ各國ノ博物館ニ藏シテ専門家ノ研究ニ供セリ 是等ノ繪畫ハ六朝盛唐ノ時ニ方リテ東西文明ノ互ニ接觸セル地點ニ於テ發達シタル藝術ニシテ實ニ氣象雄大渾厚ヲ極メタルモノナリ 斯ノ如キ繪畫ノ研究ハ臆テ將來ノ繪畫ノ傾向ヲ研究スルニ屈竟ノ資料タルベキヲ信ス

我々日本畫科ニ於テモ將來ノ日本畫カ如何ナル方向ニ進展スベ